



「産婆術」においてソクラテスがいかなる役割であるか

多鹿, 雅人

(Citation)

愛知 : $\phi \iota \lambda \omicron \sigma \omicron \phi \iota \alpha$, 28:15-29

(Issue Date)

2016-12-22

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041132>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041132>



「産婆術」においてソクラテスがいかなる役割であるか

多鹿 雅人

導入

本稿は、「ソクラテスの産婆術 Socratic midwifery (S.M.)」が、対話相手に対していかなる役割を持つかを検討する。さて、このS.M.は、『テアイテトス *Th.*』においてのみ登場し、通常、ソクラテス¹⁾がその担い手である、と解釈される。しかし、Wengertは「産婆術のパラドックス」に従い、ソクラテスが産婆ではありえないことを示す。しかし、この解釈では、*Th.*でソクラテスが産婆として登場する、それ自体の意義を見過ごしかねない。つまり、Wengertが示す解釈によっては、S.M.におけるソクラテスの対話相手に対する役割がどのようなものであるかを誤解する可能性がある。とはいえ、Wengertの解釈は部分的には正当性を持つ。そこで論者は、まずWengertの見解を批判的に検討した後、本稿と立場を近しくするBrickhouse & Smithと東の解釈を援用しつつ、*Th.*のテキストよりS.M.型学習・教育モデルを抽出する。そして、ソクラテスをこのモデル中の教育側に位置づけることによって、その役割を明確にする。そのため本稿は次のような構成をとる。

まず第一節では、Wengertの解釈を要約し、その解釈の有用な部分を取り上げる。第二節では、まず、その部分が、「ソクラテスが産婆である」という仮定からも解釈可能であることを示す。そして、その際問題となる「産婆術のパラドックス」として提示される箇所にも、同様の仮定から解釈可能であることを示す。第三節では、まずBrickhouse & Smithの解釈を要約した後、東解釈を参考に、それを発展させたS.M.型学習・教育モデルを、テキスト上の証拠を提示しつつ展開し、その中でソクラテスの役割を確定させる。

1. 「産婆術のパラドックス」

ここではまず、Wengertの見解を理解するために、「産婆術のパラドックス」がいかなるものであるかを説明する。Wengertがこのパラドックスに基づき、自らの解釈を展開しているからである。その後、このパラドックスから導かれた解釈の有用な部分を取り上げる。

1.1. 「産婆術」に関するソクラテスの説明

ここでは、「産婆術のパラドックス」がいかなるものであるかを理解するために、ソクラテスがS.M.をいかに説明しているかを簡単に見る。これは、「産婆術のパラドックス」が、その説明のうちに現れているためである。それでは、その要約を以下の通りに示そう。

ソクラテスは S.M.を、女性の出産を補助する、通常の意味での助産術と同じ「技術 τέχνη」として示す (149a)。しかし同時に、その目的が「魂が産み出す τὰς ψυχὰς τικτοῦσας」(150b) のを助けるものであること、そして、通常の意味での助産術にはない仕事を持っている、という相違点があることを述べる。その仕事とは、対話相手の「思考 διάνοια」が「まがい物で虚偽 εἰδωλον καὶ ψεῦδος」か「本物で真理 γόνιμὸν τε καὶ ἀληθές」を「産み出す ἀποτίκτει」かを「検査 βασανίζειν」する (150b-c) というものである。

また、このように S.M.を行っている主張する (149a) ソクラテスは、自らが「生み出せない者 ἄγονος」(150c) である、と述べる。ソクラテスは、この点も通常の助産師との類似点であることを述べる。ソクラテスによれば、通常の助産師は、自らが妊娠・出産できる状態のまま他人を助産することがなく、産めなくなった状態で行う (149b)。つまり、通常の助産術は、妊娠できない状態の助産師によって行われるという点が、ソクラテスの状態と類似しているのである。しかしながら、助産師は自身の出産の経験を持つのに対し、ソクラテスは自らの出産の経験がない (150c-d) という点で相違がある。

さて、「産婆術のパラドックス」はこの点に関わる問題点である。つまり、このパラドックスにおいては、ソクラテスに出産の経験がないことがその焦点となる。以下は、Wengertが問題として挙げるテキストである。

[a] こういったわけで、—事実上、産むことのできない女性に産婆の技術が与えられなかったが、それは人間的な本性が、人々が無経験である場合に、技術を獲得するのに貧弱であるからなので (ὅτι ἡ ἀνθρώπινη φύσις ἀσθενεστέρα ἢ λαβεῖν τέχνην ὧν ἂν ᾗ ἄπειρος), 年齢のために産めなくなった女性には、(結婚、出産を司る処女神アルテミスが) 自身との類似性を尊重して、産婆の任を命じた。(149c)

[b] 神が僕を助産するように強制して、産めなくした (μιαυέσθαι με ὁ θεὸς ἀναγκάζει, γεννᾶν δὲ ἀπεκάλυσεν). だから僕自身は全く知者ではないし、僕の魂の子どもとして生まれたようなどんな発見も、僕の中にはないんだ。⁽¹⁾ (150c-d)

つまり,[a]では、通常の助産術に出産の経験が必要とされているのに対し,[b]では、ソクラテスに出産の経験がないことが述べられている。それゆえ、ソクラテスは産婆ではありえない⁽²⁾。これが「産婆術のパラドックス」の概要である。

1.2. Wengert 解釈の有用性

さて、Wengert は以上のパラドックスに基づく帰結 (「ソクラテスは産婆ではありえない」) から、次のような解釈を導く。それは、ソクラテスの方法は真理を生み出させるためには不十分なので、実りある探求の方法によって取り換えられなければならない、という解釈である。この解釈はつまり、次のようなことを意味している。そもそも不妊のソクラテスには、「真理」を生み出させることはで

きず、相手の説を否定するにとどまる。これは、*Th.* でソクラテスの対話相手を務めるテアイテトスが、その生み出した「子ども」を、最終的にすべて「実りのないもの」(210b)と判定されてしまうことが証拠となっている。つまり、プラトンはソクラテスが産婆であるとする、このように「真理」を生み出すことができないと示すことで、ソクラテスとは異なる方法の必要性を示したと言う⁽³⁾。

この解釈に従えば、プラトンがなぜ「知識とは何か」という探求の失敗を描いたのか、その後編と見なされる『ソフィスト *Sph.*』・『政治家 *Pol.*』でなぜソクラテスを登場させなかったのか、という問いに答えを与えることができる。すなわち、ソクラテスの方法は「真理」を生み出すためには不十分であるので、*Sph.*・*Pol.* では、プラトン自身の新たな方法として「エレアの哲学者」に「分割・総合」を用いさせた、と言

うことができる。また、*Th.*でイデア論や想起説が登場しないことについても、産婆であるソクラテスにイデア論および想起説を語らせないことにより、それがプラトン自身のものであることを強調しようとしたと、解するのである⁽⁴⁾。

Wengertはこのようにして、三部作とされる *Th.*、*Sph.*、*Pol.* との関連性を背景に、「ソクラテスが産婆ではありえない」という解釈を展開する。

2. Wengert解釈の有用性を「ソクラテスが産婆である」から導く

以上の解釈で説明される三部作の関連性は、十分に有用なものだと言ってよいだろう。しかし、以上の有用性を導く上で、「ソクラテスが産婆ではありえない」と言う必要はあるだろうか。むしろ論者は、その主張により、*Th.*における S.M.の意義を見失うことになると考える。しかしながら、その主張（「ソクラテスが産婆ではありえない」）から導かれた解釈が有用であると認めるならば、われわれは当然、「ソクラテスが産婆である」という立場からも、先のWengert解釈の有用な点を取り出す必要があるだろう。そこで本節では、まずSedleyの見解を参考に、イデア論と想起説が現れてこない理由を、「ソクラテスが産婆である」という仮定から説明する。次に、Wengertが「ソクラテスが産婆でありえない」と主張する根拠である、「産婆術のパラドックス」について異なる解釈の可能性を示す。この時、ソクラテスの方法が、「真理を生み出す」という目的のもとでは不十分であることも認めることとする。しかし、この不十分さは、ソクラテスが産婆である可能性を否定するものではない。なぜなら、ソクラテスが産婆である意義は独自に存在し得るからである。この点については、次の節で触れることにする。

2.1. Sedley解釈

Sedleyの基本的な立場は、対話篇に現れるソクラテスと著者プラトンを分割する、というものである⁽⁵⁾。この立場では、*Th.*の著者であるプラトンと、対話篇中のソクラテスが主張する事柄にギャップがある、と解される。Sedleyの立場はこのギャップの中にプラトンの目的を見る。では、このギャップはどのようなもので、プラトンはどのような目的を持っていたのだろうか。

まずこのギャップを簡単に述べておくと、対話篇中のソクラテスは「準歴史的 semi-historical」であり、プラトン自身はイデア論や想起説に深く関わりを持つ。この「準

歴史的」という点に関して次のように説明できる。それは、アイデア論や想起説にコミットしない初期対話篇のソクラテスが、産婆という形で集約されている、という点である⁽⁶⁾。初期対話篇中のソクラテスは、自らの無知を称しながら相手を反駁していく。このようなソクラテス像は、S.M.を行使するソクラテスにも当てはまる。また、Sedleyによれば、*Th.*全体の知識論で、アイデア論を前提とした議論が行われないこと、そして、ソクラテスが197e2-3で想起説に反する前提⁽⁷⁾をしていること、以上の二つを証拠にこの解釈は正当化される。

また、この目的に関してSedleyは、「「産婆術的」解釈 ‘maieutic’ interpretation」という、プラトンがテキスト内部と外部に対する二つの S.M.を描いたとする解釈を展開する⁽⁸⁾。これはつまり、*Th.*でのS.M.が、対話篇中のテアイテスと、読者であるわれわれに対して行われている、とする解釈である。後者について具体的に述べると、Comfordを代表とするReadingAとBurnyeatが展開したReadingBの検討をわれわれに迫る、というものである。また、ReadingAは知識の定義の失敗をアイデア論抜きに議論したことだと解するもので、ReadingBはアイデア論を前提としない知識論をプラトンが展開しようとした、とする解釈である。しかし、ReadingA,Bの正当性を問う時、この‘maieutic’ interpretationに対する疑念は、もちろん生ずる⁽⁹⁾。とはいえ、もしこの解釈に疑念を抱いたとしても、対話篇中のソクラテスがアイデア論を論じず、想起説とは反する前提を行っていることを証拠にすれば、著者プラトンと産婆ソクラテスの分割を図る道が閉ざされたわけではない。ここで、このSedleyの立場を採用するならば、「アイデア論や想起説、および*Sph.*での方法がプラトン自身のものであることを強調した」というWengert解釈の一つを、「プラトンとソクラテスの分割」というテーゼから導くことができる。つまり、以上の立場をとることで「ソクラテスが産婆である」という仮定から、上記のようなWengert解釈の有用性を導くことができるのである。

2.2. 「産婆術のパラドックス」を避ける

先に、[a],[b] のテキストがパラドキカルであることを確認した。しかし、以上のパラドックスは、[a]で言及されるように、処女神アルテミスが子どもを産んでいないという意味で、出産に未経験であるソクラテスと類似するという点を提示することで回避できるだろう⁽¹⁰⁾。だが、[a]のテキストにある「無経験である場合に、技術を獲得するのに貧弱」という言及から、S.M.の獲得にとって、ソクラテスの出産の未経験は問題とな

りうるだろう。これに対し本稿では、S.M.の技術の内実がソクラテスの経験から得られたという解釈を提示することで、この問題点を回避する⁽¹¹⁾。この戦略のために、以下ではまず、*Thl.* 148e-151d および、それに関連の深いテキストから、S.M.の内実と解しうるものを提示する。その後、ソクラテスがそれらを既に経験したと解することができる根拠を提示する。

以下はS.M.の内実として提示できるものである⁽¹²⁾。

- (a) 「陣痛 ὥδεις」の判別: ソクラテスが問いかけ、それに対し対話相手が答えを持っているかどうかを、ソクラテスが判断する。148eでは、S.M.行使の出発点となっていることが見て取れる。
- (b) 「出産 τόκος」の促進: 対話相手の答えにソクラテスが問いかける中で、その答えの意味を明確化するものである。この実行は、151d-160d中に、この技術のソクラテスの説明 (157c-d)と共に、見出すことができる。
- (c) 「子ども παῖδιον」の取り上げ: 160d-eに見られるように、対話相手の答えを確定させる言明をソクラテスが行うもの。
- (d) 「子ども」の真偽判定: 1.1.で述べたとおり、ソクラテスの引き出した対話相手の考え(子ども)が、「本物」であるか「まがいもの」であるかを見分ける技術。その実行は 161aに宣言されている。
- (e) 「縁結び προμνηστικός」の技術: 対話相手がソクラテスを不要とするか、ソクラテスに交わりを禁止するダイモニオンが現れる時、その対話相手に相応するような知者を推量して引き渡す技術。

*Thl.*をつぶさに確認する時、(a)-(d)に基づくソクラテスの経験を確認することは容易である。まず(a)は、「陣痛」を問いに対する「行き詰まり ἀπορία」と解すれば、ソクラテスがそれを経験しているのは明らかである。145dでソクラテスは、「知識とは何か」という問いを、自らも「困っている ἀπορεω」ものとして、テアイテトスに提示している。また、(b)-(d)をエレンコスのようなものであると解する時、ソクラテス自身がこれまで多くの議論に取り組んできたことが、その経験として示し得ることになる。さてここで、(b)-(d)をエレンコ斯的に解しうるかであるが、その前にエレンコスがいかなるものであるかを瞥見しよう。Vlastosによれば、これは次のようなものである⁽¹³⁾。

1. 対話相手が一つの立言 p を証明する (ソクラテスはこの p の反駁を試みる).
2. ソクラテスはさらに他の前提 q, r について同意を得る (この時ソクラテスは q, r を真と仮定した上で議論を進める).
3. 2.から p の否定命題を必然的帰結として対話相手に同意させる.
4. p の棄却を求める.

もちろんこの議論構造が S.M.全てに当てはまるとは限らないが、151e-161eおよび、162d-164bの議論は、その手順を満たす例として提示できるだろう。151e-160eでは、ソクラテスがテアイテスの「知識と知覚は同一である」という説から、テアイテス自身も認めるような説 (人間尺度説、生成流動説) を引き出し、それらが「同じところに逢着する」(160e) とするものを「子ども」として取り上げている。つまりこれは、上記の1.および2.に当たると考えられる。また、162d-164bでは、テアイテス説の問題点を以上の手順で引き出している。以上のことから、(b)-(d)にエレンコスの要素が含まれるのは明らかである。また、次の引用はソクラテスがこれまで多くの議論に取り組んできという証言である。

これまで私は、論ずることに力がある、ヘラクレスやテセウスがいの人には、数多く出会いました。確かに彼らは、私をこてんぱんに打ちのめしてくれたものです。が、私はいくら打たれても、決して闘技場から出ませんよ。(169b)

また、この証言を待たずとも、ソクラテスの議論に対する取り組みの多さを疑うならば、われわれの持つソクラテス像は大きな変更を強いられることになるだろう。

しかし、(e)に関する経験を Th から示すことは困難である。とはいえ、Mintzに従えば、初期対話篇中およびクセノフォンの著作中にその例を見出すことができるだろう⁽¹⁴⁾。ここで、ソクラテスが(e)のような活動を、そのように実行してきたと言えるならば、そこに(e)を獲得するための経験を見出すことができるだろう。

以上から、われわれは「産婆術のパラドックス」を無害なものとして見ることができるのである。

3. S.M.の意義とソクラテスの役割

本節では、「ソクラテスが産婆である」という固有の意義を探る中で、ソクラテスがS.M.においていかなる役割を持つかを論ずる。本稿ではその意義を、次のようなS.M.の助産方法に関連させて解する。それは、S.M.における産婆の役割は、真理に向かって誘導するというものではない。対話相手に困難を深く認識させることで、新たな言論を生み出させるのである。以下では、Brickhouse & Smith解釈の援用により、プラトン著作全体の中のソクラテスの教育モデルをリストアップする。Wengertが想定する産婆像がS.M.モデルではないことを確認するためである。そのあと、東解釈を援用しつつ、S.M.型教育・学習モデルを明確にする。そして、このモデルの教育側にソクラテスを置くことで、「S.M.においてソクラテスがいかなる役割であるか」という問いの一つの解答が得られるだろう。

3. 1. S.M.型学習・教育モデル

■ Brickhouse & Smith解釈 同者は、ソクラテスの教育モデルとして以下の三つのモデルを提示する⁽¹⁵⁾。

- (1) 『ソクラテスの弁明 *Apl.*』を代表とするエレンコス的モデル: ソクラテスが自ら無知を称しながら、反駁を通して、対話相手に自身の無知を気づかせるというもの。
- (2) 『メノン *Men.*』を代表とする想起モデル: ソクラテス自身も答えを知りつつ、問いを重ねる中で対話相手を「正しい考え *ἀληθεῖς δόξα*」(*Men.*85c) に導く。
- (3) *Tht.*のみに登場するS.M.モデル: Brickhouse & Smithは、このモデルが次の三つの特徴を持つと述べる。
 - 〈1〉 初期対話篇(とりわけ *Apl.*)では、ソクラテスはどんな技術の所有も否定している一方、S.M.はソクラテス自身が持つ技術である。
 - 〈2〉 初期対話篇では対人論法(*ad hominem*)を用いるのに対し、S.M. では「陣痛」を引き起こす事によって「出産 *giving birth*」を助ける。
 - 〈3〉 初期対話篇では、自分自身の見解のために議論をする用意があるが、S.M.におけるソクラテスはいかなる見解も持たない事を説明する(*Tht.*161b)。

■ **S.M.型学習・教育モデル** Wengertが想定する産婆像は、せいぜい(2)にとどまるものに過ぎない。この点において、同者の解釈がS.M.の特徴を捉えるには不十分であることが分かるだろう。とはいえ、以上の特徴を述べるだけでは、十分なモデルを抽出したことにはならない。そこで以下では、東の解釈を援用することによりこのモデルの具体化を図る。

東の解釈 同者は、*Thu.*を「ソクラテスの教育方法を端的に示す作品」(p.141)と解する立場をとる。そのため、同者の解釈の根拠は、*Thu.*中の知識に関する議論が大半である。さて、次の引用にこの解釈の要点が集約されている。

産婆術とはむしろ、自己吟味への援助であり、正解としての結論へと導く過程の援助ではない。知識を産出することが産婆術ではなく、変化する世界の中で自分の論拠を問い直す機会を与え、自分に向かい合い、自分を問い直していくことが産婆術である。⁽¹⁶⁾

東の示すテキストからこの解釈を示すことは確かに可能である。しかし、同者の見解は、必ずしも*Thu.*におけるS.M.の実行に即して論じられたものではない。とはいえ、この解釈は、本稿の2.2で触れた点を考慮したものである(*id.*, p.151)。それゆえ、この解釈は有効なものともみなしてもよいだろう。

では、これらの解釈を基にいかなる教育・学習モデルを抽出できるだろうか。われわれはテキストから、このモデルの次のような成立条件を上げることができる。

- A. 教育側は、S.M.で問われる問いの答えを知る者ではない(150c,157c-d,161a-b)。
- B. 教育側はあらゆる方法を用いて、対話相手が提示する説の問題点を指摘することができる(150c)。
- C. 教育側は、対話相手の説の検討を超えて自らの主張を行うことはできない(150c,157c-d,161a-b)。⁽¹⁷⁾
- D. 学習側は、S.M.で問われる問いを自ら悩み答えようと試みる必要がある(151d)。
- E. 学習側は、提出された問題点を引き受けてさらに答えなければならない(163c,187a-e,195e-196b,201a-d)。
- F. 学習側は、S.M.で得られた帰結を受容しなければならない(151c,210b-d)。

ちなみに、以上の () 内にはこの主張の根拠となるテキスト箇所が示されている。

3.2. S.M.においてソクラテスがいかなる役割であるか

それでは、以上から S.M.においてソクラテスがいかなる役割であるかを特定していく。その前に、先に挙げた成立条件を基に、S.M.型教育・学習モデルを組み上げる必要があるだろう。これに際して、東解釈と本稿のわずかな立場の違いを表明しなければならない。

東は以上の引用に加え、知的出産後の世話や配慮の重要性を説く。これは、「知的出産の後の世話や配慮が不適切ならば、誤った見方や、独善的な見解、衆愚政治に傾きやすい迎合性という危うさを持つ」(p.151) という理由からである。そして、そのためにソクラテスは、対話相手が持つ知識を一つずつ取り出し、「他者の知識と比較し、その整合性を確認し」対話相手の知識の体系の中に位置付ける、という作業を行う(p.150)。これを受容し、対話相手が自身でも自らの知識の吟味を行い続けることこそ、この教育・学習モデルに他ならない。もちろんテキストからも、そのような「世話 *τρέφειν*」や「吟味 *σκέψις, εξέτασις*」の重視を読み取ることができる⁽¹⁸⁾。このような点からも、全体的な方向性において、この解釈は受容可能とみなせるだろう。

しかし本稿では、この解釈に次のような問題点を提起する。

- I. テキスト上に現れるソクラテスの強い否定性を見過ごしかねない。
- II. ソクラテスの死後に、プラトンがS.M.を描いたという事実を捉えきれない。

まず、I.に関して次の二つのテキスト上の根拠を提示しよう。

<a> 私の技術のうちで最も偉大なもの (*μέγιστον*) はこれであるあらゆる方法で、若者の思考が、虚偽で偽物を産み出すか、本物で真理を産み出すかを調べ上げる (*βασανίζειν*) ことができる。(150b-c)

 それではもし、他のこどもを、これらの後に、孕む者として君が生み出そうと試みる (*ἐπαιρείς*) ならば、テアイテトスよ、また、産み出すならば、今の探求によって、より善きも

ので 満たされるだろうし空っぽであっても、君が知らないことを知っているとは思わないために、付き合いに鈍くはなくなり、より節度ある温和な者になるだろう。(210b-c)

われわれは、まず<a>でソクラテスの強い否定性を見、でS.M.が行われた後の出産に対する強調を見ることができる。ソクラテスは<a>で, βασιλεύειν という

「拷問にかける」という意味を持つような強い言葉遣いをしている (cf. Liddell & Scott). そして、このような「調べ上げ」こそがS.M.において「最も偉大なもの」なのである。つまり、ソクラテスはS.M.中で、対話相手の説を徹底的に調べ上げて否定する。これは、すでに述べた*Th.*全体の構成からも支持される産婆像である。東解釈はこの点の強調を欠いている。また、*Th.*におけるS.M.実行後に述べられたでは、S.M.での吟味が今後の「出産」にとって有益であることが述べられている。つまりここでは、東解釈の強調する「吟味」や「子どもの世話」というよりも、対話相手が今後も新たな「出産」に取り組むことを強調しているという方が、この引用にはふさわしいだろう。

II.については、このS.M.自体がソクラテスの死後に描かれたことを根拠とするものである。つまり、東解釈が想定するような、直接の対話相手にのみ成り立つ産婆像では、死後もソクラテスが、プラトンにとって産婆とはなりえない。なぜなら、このモデルはソクラテスが知恵の吟味をすることを想定しているからである。もし、死後もソクラテスがプラトンにとって産婆であり続けるならば、「産婆」という役割について異なる解釈を示す必要がある。

以上の二点により、本稿が提案するのが、「産婆」ソクラテスを否定の象徴とする解釈である。つまり、「産婆」ソクラテスは、不在であっても、その否定の精神を意識させる存在であればそれで良い。何かを論じようとする人が、「産婆」ソクラテスを意識することで、常に自らの論を批判し、新たな言論の出産へと赴くことになる。このような「産婆」像をソクラテスに帰すことで、プラトンにとっても、強いてはわれわれにとっても、ソクラテスは「産婆」であり続けることができるのである。

では、この点を踏まえた上で、S.M.型学習教育モデルを次のように組み直そう。ソクラテスはまず、対話相手に問いを与え、苦しませる。この問いは、対話相手の信念基盤にとって非常に重要な問いである。(*Th.*においては幾何学等の諸学問の徒であるテアイテトスに「知識とは何か」と問いかけている。) それに対し、対話相手は答えを提示しなければならない。その答えを受けて、ソクラテスはその意味を確定していく。そ

うして確定された内実から、ソクラテスは数多くの困難を引き出す。対話相手は、S.M.が進むにつれてソクラテスと困難を共有していくのである。対話相手がこの困難を引き受けた時、新たな「子ども」の「出産」の要求として、S.M.型教育・学習モデルが成立するのである。

帰結

以上により、Wengert解釈とは異なる産婆像を見出すことができるだろう。すなわちそれは、「ソクラテスが産婆である」という意味は、真理を教え諭すための導き手である、ということにはない。ソクラテスは対話相手に困難を与え続けることによって、対話相手が自発的に自らの考えを吟味し、常に新たな「出産」に向かうことを要求する。そして、ソクラテスとその否定の精神の象徴となることで、ソクラテスが不在であっても、ソクラテスをわれわれが意識し続けることで、独断的な見解に陥らず、常に新たな言論を要求される。この意味においてこそ、ソクラテスは「産婆」なのである。

しかしながら、S.M.を本稿のような形で捉えるならば、ソクラテスによるS.M.の実行の中で、「実りある子ども」が生み出されることはありえない。なぜなら、ソクラテスはあくまで対話相手が産み出した「子ども」(言論)を否定しようとする役割に徹しているからである。この点において、*Sph.*で登場する「分割・総合」というプラトシ自身の方法論の必要性が現れると考えられるだろう。もちろん、「分割・総合」をプラトンがいかなる必要性から論じたか、ということに対しては議論がありうる。この点については今後の課題としたい。

註

- (1) 本稿の訳文は、田中訳、渡辺訳、ほか諸英語訳を参照しつつ、論者が手を加えたものである。
- (2) Wengert, p.4.
- (3) Ibid., p.8.
- (4) Ibid., p.7ff.
- (5) Sedley(2004), p.7.
- (6) Sedley(2004), pp.6-13. Reading A, B に関しては Burnyeat(1990), pp.8-10 を参照のこと。また、藤沢(2014), pp.115-121 では、これを用いて、研究者の諸見解が分類されている。
- (7) Sedley(2004), pp.28-30. 当該の議論は、Sedley(1996), pp.93-103 で詳細に検討されている。同

様の見解としては、Burnyeat(1977), p.10 が挙げられる。また、McDowell は端的に想起説と産婆術の関係性に疑問を表している (p.116f)。

- (8) Sedley(2004), p.5ff.
- (9) 例えば、田坂は Reading A,B ではない第三の道として、*Th.*の議論展開を「対象を誤ることなく認知する条件を<自分の思いなし文脈>から独立に設定しようとする試み」(xvii) が頓挫する、という解釈を展開する。
- (10) 本稿では、このように、ソクラテスと神の類似性を強調することで、ソクラテスの「善意 εὖνοια」(151c) が主張しやすくなると解する。同様の見解として Tschemplik, p.51f を参照されたい。また、この見解の先行者として Campbell, p.28 を上げることができるだろう。ちなみに、Wengert はこの解釈を認めないが、その根拠は明確ではない。
- (11) 異なる戦略として、Benardete, pp.199-1.102 を参照されたい。同者は本稿とは異なり、当該の言明が、アプリオリで不可謬な知識と可謬な経験という二つを組み合わせることで知恵を獲得する、という考えのもとなされた、とする解釈を展開している。この解釈の検討は、本稿の解釈には直接影響しないため、ここでは行わない。
- (12) Chappell, p.42f では、同様の技術内容がリストアップされている。
- (13) Vlastos, p.46. また、Robinson, pp.22-24 ではエレンコスの論理構造がリストアップされている。しかし、決まった方法を持ってソクラテスが議論しているか否かについては議論がある(e.g. Scott.). だが、*Th.*ではソクラテスが S.M.を「技術」として示している以上、何らかの方法を持つと想定することは難しくないだろう。本稿では、紙面の都合上、これ以上この問題には立ち入らない。
- (14) Cf. Mintz, p.91f.
- (15) Cf. Brickhouse & Smith, p.185f. Giannopoulou, pp.38-40 も<2>に関して同様の見解を示している。
- (16) 東, p.142.
- (17) Giannopoulou は、ソクラテスが自ら不妊であるという意味を整合的に解するために、ソクラテスが自らの問いに対する「定義」を禁じている、と解する(pp.40-47)。同者の主張に関して、論者も同意見である。
- (18) 164c-e, 165e-168c では、テアイテトスとの間で合理性が認められたプロタゴラス説を、ソクラテスが反駁する際、テアイテトスは簡単に屈してしまう。しかしそのあと、プロタゴラスの口を借り、ソクラテスは徹底的な吟味とプロタゴラス説の養育を要求している。

参考文献

- Benardete, S. (1984). *The Being of the Beautiful*. Chicago.
- Brickhouse, T.C. & Smith, N.D. (2009). 'Socratic Teaching and Socratic Method', *The Oxford Handbook of Philosophy of Education*, pp.177–191. Oxford.
- Burnyeat, M.F. (1977). 'Socratic Midwifery, Platonic Inspiration', *Bulletin of the Institute of Classical Studies*, Vol.24, Issue1, pp.7–16.
- (1990). Introduction to M.J. Levett (trans.), *The Theaetetus of Plato*. Indianapolis.
- Campbell, L. (1861). *The Theaetetus of Plato*. Oxford. (Arno. 1973.)
- Chappell, T. (2005). *Reading Plato's Theaetetus*. Hackett.
- Cornford, F.M. (1935). *Plato's Theory of Knowledge*. Routledge.
- Duke, E.A., Hicken, W.S., Nicoll, M., Robinson, D.B., Strachan, J.C.G.(ed.) (1995). *Plato Opera Volume I* (Oxford Classical Texts). Clarendon Press.
- Giannopoulou, Z. (2013). *Plato's Theaetetus as a Second Apology*. Oxford.
- McDowell, J. (1973). *Plato Theaetetus*. Oxford.
- Lidell, H.G. & Scott, R. (1996). *A Greek-English Lexicon*, 9th edition. Oxford.
- Mintz, A. (2007). 'The Midwife as Matchmaker: Socrates and Relational Pedagogy', *Philosophy of Education Yearbook*, 2, pp.91–99.
- Robinson, R. (1953). *Plato's Earlier Dialectic*. Oxford. (1984.)
- Scott, G.A.(ed.) (2002). *Does Socrates have a method? : rethinking the elenchus*. Pennsylvania.
- Sedley, D. (1996). 'Three Platonist Interpretations of Theaetetus', in C. Gill and M. M. McCabe (eds.), *Form and Argument in Late Plato*. Oxford.
- (2004). *Midwife of Platonism—Text and Subtext "Theaetetus"*. Oxford.
- Tschemplik, A. (2008). *Knowledge and Self-Knowledge in Plato's "Theaetetus"*. Rowman & Littlefield.
- Vlastos, G. (1983). 'The Socratic Elenchus', *The Oxford Studies in Ancient Philosophy*, Vol.1., pp.36–63.
- Wengert, R.G. (1988). 'The Paradox of the Midwife', *History of Philosophy Quarterly*, Vol.5, No.1, pp.3–10.

東敏徳 (2010). 「テアイテス篇におけるソクラテスの産婆術と教育」, 『哲學』
No.124, pp.139–156. 三田哲學舎.

田坂さつき (2007). 『『テアイテス』研究—対象認知における「ことば」と「思いなし」の構造』. 知泉書館.

田中美知太郎訳 (1966). 『テアイテス』. 岩波書店.

田中美知太郎, 藤沢令夫編 (1974–1978). 『プラトン全集』. 岩波書店.

藤沢令夫 (2014). 『プラトンの認識論とコスモロジー —人間の世界解釈史を省みて』.
岩波書店.

三島輝夫・田中享英訳 (1998). 『ソクラテスの弁明・クリトン』. 講談社.

渡辺邦夫訳 (2004). 『テアイテス』. 筑摩書房.

—— (2012). 『メノン—徳について』. 光文社.

(神戸大学人文学研究科博士前期)